

青年海外協力隊に現職参加して

工藤 昭征

(15-1, バングラデシュ, 理数科教師, 佐伯市立宇目緑豊中学校)

「自分にもできることがあれば、途上国の発展のために役にたちたい。」

大学生の頃から協力隊参加を夢見ていた。その頃の思いを忘れることができず教員生活を続けていたが、教員生活6年目にして初めて受験のチャンスが来た。合格通知を受けとったときに、初めてバングラデシュという国を知った。

任地は首都（ダッカ）より約40km北に離れた県だった。日本から飛行機を乗り継いで、上空から見たバングラデシュはまるで大水害にでもあったのではないかというくらい国土が水に浸かっていた。そして、飛行場から出た瞬間から私の戦いの日々は始まったのかもしれない。赴任して、理数科教師として活動をする前に、任国の人混みや臭い、停電生活、濁った水、下痢の連発など任地で生きていくことの難しさを感じた。自分がいかに日本という温室のような国で守られ育ってきたのか、赴任するまでにテレビなどで途上国の様子など見ていたが、想像をはるかに越えていた。そんな中で自分に何ができるのか改めて考え直す必要があった。

私の任地での活動要請は「小学校教員の訓練機関（PTI）で身近な物を使った理科実験をカウンターパートと共に教えていく。」という内容だった。この要請にあわせて出発までの1年間準備をしてきたが、現実とはまったく違っていた。自分の中で協力隊を美化しすぎていたのか、任地での私の扱いはまさしく邪魔者であった。なぜならお金を持ってこない協力隊は援助大国のこの国では歓迎をされない存在であったからである。任期後半になるとカウンターパートと話をするよりも校長とバングラデシュの教育について話す機会がよくあった。「おまえ達は私たちの言葉を初めはほとんど話すことができず、やっと話せるようになって仕事ができるようになったらすぐに帰っていく。あと数年ここにいて働いてくれればもっとこの国のためになるのに。」という協力隊に対する厳しい意見なども多くいただいた。

そんな状況の中で、現職参加の教員が任地で活動できる日はわずか20ヶ月。普通の隊員が2年間の活動期間があるのに対して短い。期間は短いがやりたいことはたくさんあった。任国の現実を見て、整理していく必要があったが、私は現職教師として今まで任国で活動してきた理数科隊員の活動で有用だと思われるものをまとめていくことを活動の軸にしていた。

私の活動の話をする前に、任国の初等教育の状況を簡単に説明すると、バングラデシュの初等教育は1990年に義務化され、世界銀行、アジア開発銀行をはじめ様々なドナーからの支援を得て成り立っている。様々なドナーが入ることにより資金は得られたが、そこに一貫性がなく、援助が効果的に進んでいるようには見えない。そのような背景の中、ドナーが協調

して開発を進めていこうという動きもあるが、難航しているようである。そんな中でも初等教育の就学率については一定の成果が見られる。(表1)

しかし、この数字が正確かどうかはあやしく感じずにはいられない。なぜなら、学校訪問をした際、どの学校も5年生の出席率は1年生に比べて非常に少なかったからである。

国内での地域差はかなり見られたが、親が子どもに教育を受けさせたいという希望は全体的に強かった。しかし同時に任国の子どもは重要な労働力であり、学年が上がるにしたがって重要な労働力とされるのが現実である。また、私の活動した県はIDEALプロジェクト(ユニセフのプロジェクト)が小学校現場にかなり入り込んでおり、教材配布や教師へのトレーニングも行われていた。

任地に慣れるまで、とにかく自分の足で歩いて、自分の目で見ることから活動を始めた。私のたどたどしい現地語に興味を持ち聞いてくれる人は少なかったが、とにかく自分で見たもの聞いたものを信じていくことにした。そんな中でなぜユニセフの教材が使われないのか、どういうトレーニングが必要なのか考えていった。この国の教育は暗記中心教育である。たしかに子ども達もいろいろなことを知っているが、知識と経験とが結びつかず、また考えることが苦手で、大人でも深く考えることができている人が多い。赴任当初は、自分の語学力不足が原因と思っていたがそれが教育によるものではないかと考えるようになった。

任地の生活に慣れ、当初私は「PTI内での活動」だけを考えていたが、それだけでは現場のニーズが見えずに当を得た活動ができないのではないかと思い、「PTI外での活動」も積極的にしていくことにした。

職場では私は3代目にあたりカウンターパートも日本で研修を受けたこともあったので、お互いの短所や苦手な部分をカバーしながら研修生に授業を行っていった。また、赴任当初より教師への実験集の必要性を感じていたので、任国の教科書を他の隊員と協力して翻訳し、教科書の内容に沿った実

(表1)

指標 (%)	目 標		実績(1998)		
	1991	2000	全体	男	女
初等粗就学率	76	95	96.5	98.4	94.5
初等純就学率	-	-	81.4	80.0	82.9
初等修了率	40	70	65.0	-	-
成人識字率	35	62	55.9	63.1	48.1

(出所)バングラデシュ初等大衆教育省、EFA The Year 2000 Assessment-Bangladesh Country Report, 1999.

(注)学齢人口に対し、当該年齢外も含む就学者の比率は粗就学率、当該年齢就学者のみの比率は純就学率。



験集づくりをしていった。また、任期中盤には研修生が行う教育実習に注目し、自分たちで授業を振り返るような「自己評価カード」を作成し行った。要請以外の活動なので校長から反対されると思っていたが、逆に校長から「レポートとして提出して欲しい。」という要請を受けた。

P T I 外での活動については、当初校長の理解が得られず、休日などを利用して活動していたが、校長の転勤を機に可能になった。私は中学教師なのでやはり実験などで子どもの驚く様子などを見ることが出来る活動は楽しみでもあった。学校訪問などを行い、現地の教師と話をしていく中で、任国に今必要なのは理科よりも数学ではないかと思うようになってきた。そんな中、私の活動していた県の先輩理数科隊員が J I C A の専門家と行っていた算数ドリルプロジェクトに関わることになった。このドリル活動は 98 日間毎日継続して算数授業の初めの 5 分間を使って行うもので、地道にコツコツ行うことが苦手である任国の教師や子どもができるのか当初かなり心配されたが 2 年目を迎える学校については訪問指導を行わなくてもほとんどの学校が毎日取り組めるようになっていた。なお、この活動については J I C A ・ユニセフ・協力隊とお互いが連携を取りながら今年度も実施されている。



任地での生活も慣れてきたころ、私はバングラデシュの協力隊員で構成されている『子ども教育基金』の担当者になった。この基金はバングラデシュで活動する隊員が自分たちで資金を出し合って任国の子ども達のために何かできることはないかと十数年前から始めたものである。基金立ち上げ当初から物資面に偏る運用が多かったが、もっと協力隊らしく地域に根付いた活動ができないかということでその運用方法などの討議を続けていた。

そんな中で村落普及隊員(15-1 矢野隊員)の提案で、彼の村にプライベート教室を立ち上げることになった。教室の運営は村落普及隊員の彼が地域の権力者や教育機関などと度重なる話し合いを持ちながら行い、私は教師への教授法指導と教材(算数ドリル)提供という形で協力させてもらった。他県で違う職種の隊員と活動を共にしていくことは想像以上に大変だったがやりがいのある活動となった。



また、任国は宗教教育（イスラム教）はあるが一般的な道徳教育というものはない。他の隊員とその必要性などを討議する中で、「子ども達に生き物を大切にしたい。」「自分に正直に生きて欲しい。」などの気持ちを劇にして伝えたいということで学校や施設で人形劇を披露することになった。時には観客が人形劇の舞台裏から劇をのぞき込むようなハプニングもあった



が、子ども達の反響はよかった。2年間で9回の上演だったが、一番協力隊らしい活動だったような気がする。

任国で20ヶ月ほど活動してきて、任国の人達と喧嘩をしなかった日の方が少なかったが、自分に正直に生きていく任国の人達から学ぶべきことはたくさんあった。また、私が活動を進める上で、自分1人で行った活動がないことに改めて気がついた。任国の人をはじめさまざまな機関の方から機会と支援を与えてくださった方々に深く感謝いたします。



活動発表会

大分県
佐伯市立宇目緑豊中学校

工藤 昭征

15-1 バングラデシュ
理数科教師



バングラデシュ人民共和国

面積：北海道の約2倍
人口：1億2712万人
首都：ダッカ
通貨：タカ
(1タカ=約2円)
言語：ベンガル語
宗教：イスラム教
ヒンドゥー教
仏教
民族：ベンガル人



配属先・要請内容

初等教育訓練機関 ガジプール
(Primary Training institute, Joydebpur,
Gazipur)

要請内容

「教科書暗記中心の理科授業からの脱却をはかるため、身近な素材を利用した理科実験の推進」

活動の目的(協力隊参加への動機)

1. 任国で自分が受け入れられるか？
(自分への挑戦)
2. 今までの経験を活かして、任国理科教育の発展のために努力をする。

活動内容

【PTI内の活動】

- ・実験授業(TTスタイル)
- ・実験校での授業(TT,個人)
- ・理科準備室の獲得とその充実
- ・自己評価カードの作成、利用、改訂
- ・授業案の翻訳
- ・教科書訳(5年生)
- ・小学校学年末テスト翻訳(算数、理科)
- ・指導要領の翻訳(3年 理科)
- ・理科クラブ
- ・理科実験集(第1版、第2版)
- ・教師のモチベーション調査
- ・上申書(PTIの問題点について)

【PTI外の活動】

- ・学校訪問
- ・地域における科学祭
- ・算数ドリル活動
- ・PTI相互の連携について
- ・理科トレーニング(トライアウト)参加
- ・サブクラスター研修(理科)参加
- ・プライベート教室への指導
- ・人形劇活動
(道徳教育へのアプローチ)

理科準備室の獲得、管理



(成果・課題)

- ・旧校長と交渉の結果、赴任後2週間で手に入れることができた。
- ・突然の実験授業(訪問客による)にも対応ができるようになった。
- ・実験道具のストックができた。
- ・実験校の子ども達が科学に触れることができた。

実験授業 (Team Teaching 形式)

年	対象	種類	コマ数
2003	2ndshift	2	2
2003	1stshift	10	13
2004	2ndshift	7	3
2004	1stshift	13	13

〔成果・課題〕

・PTIの教科書と小学校の教科書を分析し、いくつかの基本実験を設定したことで少ない実験授業ではあったが、内容は充実した。
 ・TTの形式を用いて授業ができたので、お互いの不足しているところをうまくカバーしてできた。

・私の要請はPTIでトレーニーに対しての実験授業である。上の数字を見て、充分な活動ができたと言えるのだろうか？

実験校での実験授業

(TT授業, おもしろ実験授業)

学年	おもしろ実験	TT授業
2	1回	1回
3	2回	2回
4	4回	7回
5	3回	6回

・新校長の提案の元、年間の計画を立て、付属小学校の理科教師とTTで、実験授業を行った。また、実験校の教師が不足した際に、代わりに私が「おもしろ実験」の授業を子ども達に行った。

〔成果・課題〕

・年間を通して、計画通りに行うことができた。
 ・実験授業を行ったときの子ども達の反応を確認できた。

自己評価カードの作成、利用、改訂

目的: トレーニーが教育実習で授業を行った後に自分の授業を振り返ることができるようなカードの作成とそのカードの利用

〔1回目〕

・2003年1stshift 対象
 ・2種類のカード使用
 ・算数、理科

〔2回目〕

・2004年2ndshift対象
 ・カード改訂
 ・算数

〔成果・課題〕

・その場でトレーニーが授業を振り返ることができた。
 ・授業をする際のポイントを間接的に学ぶことができた。

理科実験集

〔目的〕

任国のカリキュラム内で、実験授業をおこなう為の実験集作成

〔内容〕

低コストの実験(教科書の内容「観察シート」のサンプル資料集(顕微鏡写真、天体など) おもしろ実験 折り紙



成果と課題



・任国の教育事情を考慮した実験集が作成できた。
 ・トレーニーが現場に戻って、PTIで学んだ実験が再現しやすくなった。
 ・様々な教育機関でJOVCVを宣伝することができた。

・絵から物事を学ぶことができないということに気がつかなかった。

学校訪問

目的: 現場の小学校の実態調査

期間: 2003年10月～2004年4月(計16校)

方法: PTIの授業日外に、郡内の小学校へ外出き、学校の様子や理科授業の様子などの調査。場合によっては実験紹介。

成果と課題:

・どの学校もこちらの期待以上に受け入れてくれた。
 ・現場教師にその場で実験授業を紹介することができた。
 ・授業以前に学校組織の強化の必要性を感じた。

地域による科学祭

〔目的〕

地域の子ども達に科学に接する機会を提供する。

〔期間・回数〕

2003年10月～2004年10月 計 8回

〔方法〕

休日や学校訪問終了後など地域に向向いて実験紹介などをとする。

〔成果と課題〕

- ・子ども達の科学の楽しさを感じてもらうことができた。
- ・活動の継続的実施ができなかった。(道具の運搬の問題など)

3MM(3分間ドリル)活動

〔目的〕

- ・毎日3分間、楽しみながら効率よく計算練習をし、基礎的な計算力(2年生まで)を身につける。
- ・子ども達の主体的なドリル運営
- ・集中度強化、学習意欲向上

〔対象〕

ガジプール郡 25校(1昨年度 19校)
小学校3年生



〔方法〕

修業前にドリルを出して教師を待つ。
教師の「始め」の号令で一斉に始める。
教師の「止め」の号令で止め、隣の子
どもドリルを交換する。
相手のドリルを採点する。
最後に得点を発表し、良くできた子
どもを褒め合う。

〔子ども側〕

- ・3分間 集中度、けじめ
- ・お互いにチェック 主体性、自主性
- ・基礎的内容 落ちこぼれ対策
- ・遊び感覚のドリル 学習意欲の向上



成果と課題



- ・生徒は大変興味を持って取り組んだ。
- ・集中度・基礎力強化・学習に自主性が生まれた。
- ・教師は、初めのうちは算数ドリルの運営方法や、生徒のコントロールに困難が生じていたが、慣れるに従って、スムーズに行えるようになった。
- ・毎日、前向きに取り組んだ教師は教える喜びを感じ、算数ドリルを、他の授業や教育に積極的に役立てようとしている。
- ・2年目の学校については基本的なドリル運営が定期的な巡回指導を行わなくても実施されていたことである。

プライベート教室への教授法指導

タンガイル県 スヌティア村
村落普及隊員 矢野隊員との共同活動

〔目的〕

プライベート教師への演習授業
の教授法指導

〔内容〕

- ・3MMを用いた基礎力強化
- ・授業内での演習量倍増計画
- ・できない子どもへのフォローアップ指導



成果と課題

- ・短期間による計算能力の向上
- ・子ども達が板書能力の向上
- ・教師への積極的な指導

- ・遠距離からの指導によるきめ細かな指導不足
- ・できない子どものフォローアップの不足
- ・プロジェクトの継続性



終わりに

◆ 20ヶ月の任期を終え、活動を振り返り思い出してみると、自分1人でやり遂げた活動がなかったことに気がついた。

任国の人々を始め、他のJOCV、調整員、専門家、JICAスタッフ、ユニセフ職員など様々な人から機会と支援をいただいたことに感謝を述べ報告を終了します。

本当にありがとうございました。